

《もくじ》

■特集：強いられた低線量被ばくの脅威 ～いずれ襲う「緩慢なる衝撃」に後悔しないために～
 2頁・低線量被ばくのリスクは証明されている……………崎山 比早子(高木学校)
 4頁・放射能汚染の中で暮らすということ……………今中 哲二(京大原子炉実験所)
 5頁・福島原発事故による海洋汚染……………上田 昌文(NPO市民科学研究所)

奔流

《第16号》

■発行
 千曲川・信濃川復権の会
 〒184-0012
 東京都小金井市中町2-5-13
 FAX・TEL 042-381-7770
 ■発行人・根津 東六(共同代表)
 ■編集人・矢間秀次郎(共同代表)
 ■〒振替・00120-0-710488

題字揮毫・梅原猛

大河の一滴 (16)

映画「ミツバチの羽音と地球の回転」など3部作を公開

―低線量の長期被ばくの危険性をつたえ子どもたちを守りたい―

鎌仲ひとみ (映画監督)

●「小さき声のカノン」の挑戦

震災後、三年と六ヶ月かけて取り組んできた「小さき声のカノン」を完成させ今年の3月より劇場公開を始めました。且下全国の劇場で公開中です。

3・11が起きたその瞬間、前作「ミツバチの羽音と地球の回転」が東京の劇場で公開中でした。事故後観客が詰めかけ、劇場の観客数が最高を記録しました。あれから4年、原発事故に関する世間の興味はかなり風化しました。「震災関連」映画がこの4年で200本以上も製作され「小さき声のカノン」はそんな状況の下で苦戦しています。

●大きな声が席卷する

原発の安全管理はずさんでしたが、事故後の情報管理はかなり高度にされています。まず、福島現地では真っ先に安全



全キャンペーンがはられました。先導したのは長崎大学教授山下俊一氏。これは非常に大

きな影響を与えました。その戦略は住民の郷土愛を利用することだったと思います。誰しもが留まっても安全だと言われれば信じたくなくなるはず。100ミリシーベルトでも安全」という言説が瞬く間に流布したのはマスメディアが仕事をしたからです。その後も「復興」の名の下に福島の放射能汚染は安全レベルであり、住み続けることが推奨されました。このキャンペーンにつき込まれた予算はいったいどれほどになるのか、想像もつきません。放射線管理区域に匹敵する高い線量になったことを心配する声は、小さくさせられる一方です。

●低線量長期被ばく

2003年以来、「ヒバクシャ」世界の終わりに「六ヶ所村ラプソディー」、「ミツバチの羽音と地球の回転」と連続的に核を巡る3部作を作ってきたのは「低線量の長期被ばく」の危険性を知ってもらい子供たちを被ばくから守りたいという思いからでした。

54基の原発がやっかいな放射性廃棄物を出す、核燃サイクル計画を進めれば

放射能汚染が拡大し、事故が起きれば取り返しつかないのだという事を伝えるためでした。事故以来、被ばくを巡って激しい議論が続いています。

「小さき声のカノン」では被ばくの議論ではなく、実態をチエルノブイリ原発の影響を受けたベラルーシに取材しています。福島原発事故との時間差は25年。今年の4月で事故後29年となったベラルーシでは今も、健康被害が続いています。低線量長期被ばくは20年経たないと解らないという専門家たちはベラルーシで何が起きたのかをきちんと知るべきです。この5月に福島県内だけでも1266人の子供たちが甲状腺ガンを発症していると発表され、これまで「放射線の影響とは考えにくい」とされてきた公式見解も揺らいでいます。

WHOが唯一、チエルノブイリ事故が原因だと認めた小児甲状腺ガンです。日本では否定され続けていますが、ベラルーシの現場の医師や研究者は子供たちだけではなく全ての年齢層に甲状腺ガンが事故以後増え続けており、この傾向が100年も続くと予想しているのです。

「小さき声のカノン」は白黒つけ難い現実を生きたる多様な人々の声を丁寧に拾いました。現場の声に真実があり共感こそが、これからの私たちの社会運動に最も必要なものだと思うからです。